

障害児の最後のとりで

都内の放課後デイサービス

「緊急事態」

新型コロナウイルス感染症の拡大が続く東京都内で、障害のある子どもたちが通う「放課後等デイサービス事業所」の多くが人数を絞りながら受け入れを続けている。特別支援学校の多くが休校となる中、障害児を抱える保護者らにとって「最後のよりどころ」だ。施設関係者らは感染の脅威を気にしながら運営に腐心している。

(花井勝規)

人数絞り受け入れ

自閉症や知的障害などが
ある六歳から十八歳までの
子どもが学校帰りに通う東
京都小平市の「ゆやけ子
どもクラブ」の一室。午後
三時半のおやつタイムが終
わったのを見計らって代表
の村岡真治さん(左)が手を
たたいて呼び掛けた。
「さあ、フォークダンス
の時間ですよ」。ラジカセ
から流れる曲に合わせて指
導員と手をとりあい、児童



指導員とフォークダンスを楽しむ児童ら
—東京都小平市のゆやけ子どもクラブで

放課後等デイサービス事業所 障害のある小学生から高校生までの児童・生徒が放課後や長期休暇時などに利用できる。ただ、市区町村が高校卒業後にも必要であると判断すれば20歳まで通える。小集団での活動やレク

リエーションなどを通じ、自立に向けた訓練や居場所づくりがねらい。障害児向けの「学童保育」とも呼ばれる。2012年の児童福祉法改正で制度化され、全国に約1万4000カ所、23万人以上が利用している。

親「預けないと自分がパンク」

らが踊り始めた。普段なら、やんちゃな子まで加わって大きな輪ができるのに、この日輪に加わったのは三人だけ。教室の隅では、小学校高学年の男児が指導員に抱っこをせがんでしがみついて離れない。いつもより手を強く握りしめる子、奇声やうなり声が大きくなった子、すねたように廊下に出ている子もいた。

「コロナ禍で学校が休みになり、生活リズムが乱れ、子どもたちは動揺している。障害児への影響はとくに大きい」と村岡さん。クラブでは、緑道や公園での散歩の時間を多くしたり、外から入ってきたときには手を消毒したり、室内を換気したりして感染防止に気を配っている。ただ、「三密」を防ぐように努めても限界がある。不安定な子ほど密着を求めてくるからだ。マスク着用がままできない子も多い。現場の苦悩は続いている。

学校が長期休みになる時期はいつも午前十時から午後六時まで開いているが、学校の休校措置が延長された四月六日以降は新型コロナウイルス対策で午後一時からの短運営に切り替えた。通ってくる子は普段の二十人か

ら六〜七人に減った。クラブに週五日通っている、重度の知的障害のある小学四年男児の母親(左)は「休校で、精神的に不安定になってしまった。弟を何度もたいたり、物を投げたりする。ここに預けないと自分がパンクしちゃう」。障害の程度は軽いが、行動の制御が難しい小学校低学年男児を迎えにきた父親(右)は「クラブがないと、ずっとこの子に付きっきりでいいといけない。わが家は崩壊する」と切実だ。

都内七十一事業所が加盟する障害児放課後グループ連絡会・東京によると、八日現在、休所しているのは五カ所のみで多くは活動を縮小しながら受け入れを続けている。都障害者施策推進部の調べでも都内に約九百ある事業所のうち休所は8%程度だ。

「わんぱくクラブ三軒茶屋」など世田谷区内で二カ所の放課後等デイサービス事業所を運営するわんぱくクラブ育成会によると、緊急事態宣言後に通っている子は各六〜七人となっている。子の五分の一。育成会の理事で、重度知的障害者の息子を持つ金本英美さん(左)は「外出自粛が長引き、親の不安も増しているのでメールやビデオ通話でのサポートを始めた。障害児と親の最後のとりでとして休所せず続けたい」と話す。